

企画調整員(ボランティア事業)*からひとこと



JICAボリビア
渡邊 宏和

ボリビアでは、基礎看護技術や知識、看護倫理などの基本がまだまだ足りていません。山本さんの活動は、現地医療従事者を対象とした草の根レベルでの勉強会や研修会を積み重ねていき、内部から改善を促していくよい流れを病院内に作っています。

*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査し要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。

+one information
高山病の洗礼

ボリビアへの派遣が決まり、まず思い浮かんだのは「天空の水鏡」といわれるウユニ塩湖だった。天空と呼ばれるのは標高3,700mにあるから。調べてみると、実質的な首都機能があるラパスは標高3,640m、私の任地のポトシはさらに高い4,067mと富士山より高いところに街がある。それを知った私は、高山病の予防のためにいろいろな文献を読んで備えた。

着任すると初日から軽い頭痛を感じ、鏡を見たら顔色がドス黒い。「太陽が近いからもう日焼けしたんだ」と思い込んでいた。しかし、3日ほどで頭痛が消えると顔色が普通に戻った。そこで初めて、高山病の酸素欠乏状態で顔色が悪くなっていたことに気づいたのだった。

ラパスもポトシも歩けば坂道ばかり。最初はしゃべりながら歩けないし、ご飯は沸点が低いからうまく炊けないし、酸素不足で胃腸の機能が低下して下痢になるし……。標高が高いから、日中は暑く朝晩は寒い。赴任後3~4か月は標高による弊害ばかりを感じていた。

それが今ではおいしいご飯が炊けるようになり、ジムでトレーニングまで行っている。ボリビアには高山地帯だけではなく、アマゾンの熱帯雨林地帯や渓谷地帯などがあり、地域によって住民の生活スタイルや気質も変わる。知れば知るほどたくさん見所や魅力があると感じている。

(山本貴子)



イラスト ● さかがわ成美



この人の
看護の
ポイントは?

看護学生に指導をする山本さん(左)。



日本文化紹介のイベントでは、「たい焼き」をみんなに振る舞った。



患者さんのために
がんばっています

いつも一緒に働いているICUのスタッフたちと。



JICA海外協力隊
がゆく Vol. 4

今回登場する協力隊員は、標高4,000メートルを超える高地で、地域の中核病院の看護師たちとともに奮闘しています。

in ボリビア

山本貴子

35歳
出身地: 奈良県
職種: 看護師
任期: 2017年4月~2019年4月



病院全体の
看護レベルの向上に
取り組んでいます



日本で看護師として働いていたとき、外国人の患者さんへの対応ではコミュニケーションの方法や文化の違いにとまどうことがありました。私も日本以外の社会や文化を知らなければと強く感じていたときに見つけたのが、JICA海外協力隊の募集。ボリビアからの「患者に対する看護サービスの

向上」という要請内容は、9年間の看護師経験が生かせると思えました。

赴任したのはボリビア南部にあるポトシ市。ポトシ銀山の麓として栄え、世界遺産にも登録されている街です。そこにある市立ダニエルプラカモンテ病院の集中治療室(ICU)が私の職場です。日々、現地スタッフとともに日常の看護業務を行いながら、1次救命や心電図モニターの見方、床ずれの管理方法などの勉強会も行っています。

赴任当初、私の活動の場はICUに限られていました。赴任して1年ほどたった頃、ICUで行ってきた活動や今後の目標を話す機会がありました。活動する中で、病院の看護師はそれぞれスキルを持っていて一方で、病棟ごとに能力の差があり、統一された教育体制や看護マニュアルがほしいのとは感じていました。そこで、病院内に教育委員会を設立して教育体制を整え、看護スキルをみんなでき共有できるようにしたいと発表しました。それをきっかけに、他の病棟の看護師たちと話をすることが増えました。教育委員会の設立がかない、看護マニュアルの作成に励んでいます。ボリビアでは保険制度が整っていないため国民の多くが保険に未加入で、医療費を全額負担しなければなりません。そのため患者さんのなかには、治療費が払えずに治療を断念して病院を去ってしまう人もめずらしくありません。日本では助けられても、国の制度や考え方の違いで助けられない命があることを知ったのは大きな衝撃でした。しかし、そんな中でも私の活動が少しでも現地の看護師たちの技術の向上に役立ち、仕事がやりやすくなってくれればいいと思っています。帰国後は、この貴重な経験を少しでも多くの人に伝えていきたいと思っています。

日本文化紹介のイベントでは、「たい焼き」をみんなに振る舞った。